



《10月に読む蔵で取り組む作品(プレ読む蔵)》



「リボン」(物語)

草野 たき 作

「先輩、リボンください」卓球部女子には、卒業式に先輩から制服のリボンを貰う伝統がある。試合も勝てず、彼女もいない池橋先輩に、亜樹はなぜかリボンを貰えなかった。部活も家族も友だちも「波風を立てないこと」をモットーに生きてきた亜樹の中で、今、何かが変わりつつある....。なぜ池橋先輩は彼女もいないのにリボンを亜樹にくれなかったのか？



「卵と小麦粉それからマドレーヌ」

(物語)

草野 たき 作

中学に入学したばかりの菜穂は、「もう子どもじゃないって思ったときって、いつだった？」と話しかけてきた亜矢と仲良くなる。彼女と一緒に図書室に通いつめるなどして学校生活を送る菜穂。しかし、13歳の誕生日にママが「爆弾発言」をしたことで、状況は一変した。ママと強い絆で結ばれていると思っていた菜穂。ママが13歳の誕生日にした「爆弾発言」の内容とは？ママと菜穂のその後の絆とは？

《10月に読む蔵で取り組む作品(受講1年目)》



「少女たちの季節」(物語)

生源寺 美子 作

探險家になりたかった女の子の、みずみずしい感性が捉えた激動の時代。少女の揺れ動く心を身近に感じられるように、描写している。16歳の旅立ちを爽やかに描く長編小説。



「雨鱈の川」(物語)

川上 健一 作

東北の寒村。母親と二人暮らしの小学三年生の心平は、川で魚を捕ることと絵を描くことにしか興味がない。そんな心平には心の通い合う少女小百合がいた。十八歳になった心平は村に戻り、小百合の家の造り酒屋に勤めるが、小百合に縁談が起きて...。幼なじみの透明な心を謳い上げた初恋小説。



「キッドナップ・ツアー」(物語)

角田 光代 作

甲斐性ない、だらしない、お金ない。3N(ナイ)父親とハルのひと夏のユウカイ旅行。奇妙な父と娘の関係がなんだからうやましい、新進文芸作家の描く、新しい児童文学。



「言葉の虫めがね」(説明)

俵 万智 作

たとえば万葉集をひもとけば、千年以上前の言葉が、そこにはある。言葉は、永遠なのだ。けれどたとえば、今日私が恋人に言った「好き」という言葉は、今日の二人のあいだで成立している、たった一度きりのもの。言葉は一瞬のものでもあるのだ。読む、詠む、口ずさむ。言葉を観察し、発見するエッセイ集。



「寺田寅彦隨筆集」(隨筆)

寺田 寅彦 作

寺田寅彦の隨筆は芸術感覚と科学精神との希有な結合から生まれ、それらがみごとな調和をたもっている。しかも主題が人生であれ自然であれ、その語り口からはいつも温い人間味が伝わって来る。晩年まで書きつがれた数多の隨筆から珠玉の百十余篇を選んだ隨筆



「気流のなる音」(評論)

真木 悠介 作

「知者は“心のある道”を選ぶ。どんな道にせよ、知者は心のある道を旅する。」アメリカ原住民と諸大陸の民衆たちの、呼応する知の明晰と感性の豊饒とが出会うことを通して、「近代」のあとの世界と生き方を構想する翼としての、“比較社会学”的モチーフとコンセプトとを確立する。



《10月に読む蔵で取り組む作品(受講2年目)》



「博士の愛した数式」(物語) 小川 洋子 作

1990年の芥川賞受賞以来、1作ごとに確実に、その独自の世界観を築き上げてきた小川洋子。事故で記憶力を失った老数学学者と、彼の世話をすることとなった母子とのふれあいを描いた本書は、その一つの到達点とも言える作品である。



「楽隊のうさぎ」(物語) 中沢 けい 作

中学生という、心と体の伸び盛りを愛する気持ちを忘れてはいませんか。臆病な中学生は吹奏楽部で生き生きとした自分を取り戻す。プラスハンド少年の成長を描く長編小説。



「優しい子よ」(物語) 大崎 善生 作

身近に起きた命の煌きを活写した感動の私小説。重い病に冒されながらも、気高き優しさを失わぬ「優しい子よ」、名プロデューサーとの心の交流と喪失を描いた「テレビの虚空」「故郷」、生まれる我が子への想いを綴った「誕生」、感涙の全四篇。



「嘘つきアーニヤの真っ赤な真実」(隨筆) 米原 万里 作

1960年プラハ。マリ(著者)はソビエト学校で個性的な友達と先生に囲まれ刺激的な毎日を過ごしていた。30年後、東欧の激動で音信の途絶えた3人の親友を捜し当てるマリは、少女時代には知り得なかった真実に出会う！



「伸子」(小説) 宮本 百合子 作

作者宮本百合子の自伝的要素の濃い作品。「ただの旦那様と細君」ではない新しい結びつき、結ばれて以後の矛盾、葛藤、そして別れまでを、現代にも充分通用する迫力を持って描く。



「ヤバンな科学」(評論) 池内 了 作

遺伝子操作、スペースシャトルの事故、BSE(狂牛病)問題、SARS等新しいウイルスの流行など、最近の科学技術問題の背景をわかりやすく解説。身近な自然現象や環境や食生活を考える、もう一つの新しい科学を提唱する。

《10月に読む蔵で取り組む作品(受講3年目)》



「卒業ホームラン」(物語) 重松 清 作

少年野球チームに所属する智は、こつこつ努力しているのにいつも補欠の六年生。がんばれば必ず報われる、そう教えてきた智の父親で、チームの監督でもある徹夫は、息子を卒業試合に使うべきかどうか悩むが



「日本語の手ざわり」(評論) 石川 九楊 作

手書き、縦書きでこそ生きる日本語表現の多様さ、美しさ。「考える書家」による新しくて刺激的な日本語論。横書きは文字や文体を変え、日本語のあり方を変える。いま著者が世に贈る警醒の書。



「ふなうた」(物語) 三浦 哲郎 作

一篇わずか十数枚に切り取られた人生の光と影。これぞ短篇小説の見本と言える作品を描き続ける著者が満を持して送る連作「モザイク」第2集。



「プライドの社会学」(評論) 奥井 智之 作

一般に、心理学の研究対象となっている「プライド」。しかしそれに、社会学的に接近することも可能ではないか。プライドをもって生きることは、たえず「理想の自己」をデザインすることに等しい。わたしたちにとってそれは、夢か、はたまた悪夢か。プライド—この厄介な生の原動力に、10の主題を通して迫る社会学の冒険。